

善意のワンダフルワールド——素晴らしい世界

外山喜雄・恵子 ジャズを通じた心と心のつながり

その手助けができた喜び

記事：シーラ・ストロブ記者



タイムズ・ペキュン紙から翻訳

Photos by Chris Granger

Yoshio and Keiko Toyama happy to be a part of 'heart to heart through jazz'

8月1日、外山喜雄・恵子夫妻のストーリーに新しいページが加わった。ランドリー・ウォーカー高校のバンドルームを訪れた彼らは、再びニューオリンズの若いミュージシャンのために、日本からピカピカの楽器を持って来てくれたのだ。

「1994年以来、800本になりました」。外山さんの顔には、いつものように笑顔があふれていた。

2日に開幕するサッチモ・サマーフェストの前日、高校のバンドルームは立ち見が出る満席、室内は温かさに包まれていた。高校のオレンジ・クラッシュ・



マーチングバンドと向かい合って、日本の気仙沼からやってきた中学生ジャズバンド「スウィング・ドルフィンズ」のメンバー、そして毎年8月外山夫妻とともに東京からニューオリンズへ“巡礼の旅”にやってくるワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーションのツアー客たち。

「ランドリー・ウォーカー高校へようこそ！！」とウィルバート・ローリンズ先生。

「この新しいバンドルームで生徒たちを教える機会をもらって、心から光榮に思っています。」

彼は日本語の通訳のために間を置きながら挨拶を始めた。外山夫妻はこれまで毎年、オー・ベリー・ウォーカー高校を訪れていた。今年ミシシッピ河西岸ウエストバンクの2つの高校が統合し現在、生徒たちはL. B. ランドリー通りにある統合した高校の新校舎に通っている。

ウォーカー高校のバンドディレクターだったローリンズ先生と、この日本のカップルとの温かい交流は、もう10年をこえる。

「最初にあなたに会った2003年、私たちには楽器がほとんどありませんでした」と、ローリンズ先生。「でも、今は、楽器が増えて、中学校の生徒たちにお下がりをあげられるまでになったのです」。

バンドルームでは、高校生バンドの力強い演奏が始まった。普通は野外演奏が主だが、今日はインドア用にちょっぴりワンダウンしていた。

「マーチングバンドの本格的な演奏を味わっていただきたいのですが、本気になると、皆さんを、席から吹き飛ばしてしまいそうで…」ローリンズ先生は、こういって観客の笑いを誘った。

音楽で子供たちを救おう

それは音楽が流れ、英語と日本語が飛び交った素晴らしい昼下がりであった。

ローリンズ先生と外山さん達が、どのように長い年月を通じて友人以上の存在になってきたか。そして、ニューオリンズと日本の音楽交流という彼らの夢がどのように生まれたか、が彼ら自身の口から語られた。



外山喜雄さん(中央)がドルフィンズの女の子の手を引っ張るようにして席から立ち上がらせ、セカンドライン・パレードに参加させた。左はクラリネット奏者、広津誠さん＝8月1日(木)にニューオリンズのランドリー・ウォーカー高校で

「私たちの街の生活は危険や問題が一杯です。でも、このバンドルームでは子供たちを救うことができるのです」とローリンズ先生。

音楽を通じてニューオリンズの子供たちを助ける——このことが、この二人を結びつけた共通の考えだった。

外山さんはこの日、恵子夫人と45年前にニューオリンズにきてトラディショナル・ジャズを学ばせてもらったこと。そして、この街でジャズを学び、何物にも代えがたい贈り物もらったこと。そのお礼がしたいとずっと思っていたことを話した。彼ら

の団体、ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)が、当時カーバー高校で教えていたローリンズ先生とカーバー高校バンドに、初めて39点

の楽器を贈呈しにやってきたのは2003年、10年前の事だった。

「こんな夢がかんうなんて、思いもしませんでした」と外山さん。「実は、最初にローリンズ先生にあった時、サッチモを教えた先生にそっくりだ！と思ったんです」



私は、その日の事を懐かしく思い出して思わず微笑んでいた。外山さんのルイ・アームストロング・スタイルの演奏、そして、あのサッチモのようなガラガラ声で歌うのを

聞いたのはそれが初めてだった。その日は、彼が“ポップス”ことサッチモを心から愛し、サッチモにすべてを捧げていることを、私が感じとった日でもあった。その日、彼は、トランペットやトロンボーン、サクスを手渡してこう言った。「日本の人々は、ジャズという素晴らしい音楽を世界に与えてくれたアメリカと、ニューオーリンズ、そしてサッチモに感謝したいと思っていますのです」と。

あれから10年、ランドリー・ウォーカー高校のバンドルームに集まった人々に、ローリンズ先生はこう説明した。2011の津波を見てどんなに驚かされたか、そして日本の方々からの援助へのささやかな恩返しとして、ニューオーリンズのミュージシャン達に呼びかけ、日本支援ジャムセッションを開催、2700ドルを集めたことを。

音楽による交流

ローリンズ先生は、彼と彼の友人の“ヨシ”が長い間語り合ってきたアイデアについても語った。それはニューオーリンズの若いミュージシャンを日本へ招き、また、逆に日本の若いミュージシャンをニューオーリンズに連れてくるという夢だった。

その第1章は昨年の10月に始まった。ウォーカー高校のチョーゼン・ワンズ・ブラスバンドとティピティナス財団のインター・バンドのメンバーが昨年日本を訪問、10日間のコンサートツアーを行ったのだ。そして第2章は先週スウィング・ドルフィンズがニューオーリンズを訪問、現実のものとなった。ドルフィンズたちは、サッチモ・サマーフェストとライブハウス「ティピティナス」に出演、ルイジアナ探索の旅も満喫したのだ。



「この夢は、ティピティナス財団の支援なしにはかなわなかったでしょう」とローリンズ先生は深い感謝の念を語った。日本が津波で被災した後、ティピティナス財団の創設者ローランドとメアリー・フォン・カーナトフスキーは、外山さんを通じてドルフィンズが楽器をなくしたことを知った。バンドのメンバー達は、自宅を失い、リハーサル室を失い、楽器もなくなっていたのだ。そこで財団は子供たちに新しい楽器をプレゼントしようと、楽器の購入代金1万1000ドルを円に換えて外山さんへ送った。

日本での昨年のコンサートツアーも、ティピティナス財団が支援し、国際交流基金、日本ルイ・アームストロング協会との共催で実現した。そして、そのことが今年交流につながり、この三者とTOMODACHI イニシアティブの協力も得て、スウィング・ドルフィンズのニューオーリンズ訪問が実現した。

ローリンズ先生のスピーチに続いて、外山喜雄とデキシーセイイツが、この行事にピッタリの曲、『この素晴らしい世界』を演奏した。続いて『ハロー・ドリー！』、そして、マルディグラでもお決まりの『セカンドライン』。この曲が始まるともう会場は大騒ぎとなり、ドルフィンズも、高校のオレンジ・クラッシュ・バンドのメンバーも皆立ち上がり踊り出した。

名物のガンボ料理を囲み写真交換

パーティーの最後には素敵な交換風景が見られた。ドルフィンズとランドリー・ウォーカーのバンドメンバー達全員と一緒に座り、ガンボやレッド・ビーンズ・アンド・ライス、ジャンバラヤ、デザートブレッド・プディングを食べた。でも女の子たち全員の興味は、食べることより、携帯電話の写真を見せ合うことだったようだ。

「まあ、あなたって、まるで可愛い赤ちゃん人形のようなわ」。

オレンジ・クラッシュのメンバーの1人が叫んだ。「これはあなたのママ？ これはボーイフレンド？」

ローリンズ先生は、この国際的な交流に心から感激していた。



「この光景は私にとっては夢のようです」。

私は身振り手振りでコミュニケーションし、話し笑い転がっている女の子達のテーブルを見て、しみじみと思い出していた。

このすべての交流は、たった2人から始まったのだと…。

いや、もしルイ・アームストロングを加えたら3人…だったかもしれない。

この心の交流のスタートは1950年代にさかのぼる。アメリカ映画に出ていた“ポップス(ルイ・アームストロング)”の音楽と恋に落ちた日本の少年がストーリーの始まりだ。「『グレン・ミラー物語』や『5つの銅貨』のようなジャズ映画を沢山見ました。ルイが出ていたんです」と外山さん。中学生の時トランペットを購入、独学でマスターし、高校のころにはジャズは自分の将来だと感じていたという。大学時代にはプリザベーションホール・バンドが日本で演奏、同窓の恵子夫人ともども、彼らはすっかりとりこになってしまった。

「バンド・マネージャーのアラン・ジェフ氏は、そんなにジャズが好きなら、ニューオリンズに来るべきだ、と言ってくれたのです」と外山さん。

同じ年に、ルイ・アームストロングも来日した。外山さんは楽屋に行き楽屋のドアをノックした。「カム・イン」中から、あの紛れもない声が聞こえた。

「私はテーブルの上に置いてあった彼のトランペットを見ました。『ちょっと見てもいいですか？』と。ルイは微笑んでいました」と外山さん。ルイは「いいよ」を意味するように笑顔を見せた。彼はそのホーンを掴んで、吹いてしまった。

「それは、一生決して忘れられない出来事でした」と彼は言う。

ニューオリンズの恩返し

彼と恵子さんは卒業後結婚、渡米しニューオリンズのフレンチクォーターに移り住んだ。そして、ミュージシャンとしての活動をしながら、プリザベーションホールの偉大なジャズマン達たちからジャズを学んだ。6年間の修業後、彼らは、ニューオリンズ伝統のジャズを演奏するため帰国、その日以来、常にニューオリンズで過ごした日々感謝の念を持ち続けてきた。

「まだ若くて幼かった私達を、ニューオリンズのミュージシャンたちは愛し、世話をし、ジャズを教えてくださいました」と恵子さん。「そう、だから、私たちはいつも何か恩返しをしなければと思っていました」。

1994年、マルディグラにやってきた外山夫妻は、高校のマーチングバンドの楽器が古くなり、以前のようなキラリと光る新しい楽器が全くなくなってしまったことに驚いた。また、若者たちが銃を持っていることを知り悲しくなった。それがワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)を思いついたきっかけだった。

「それが『銃に代えて楽器を』ということになったのです」と外山さん。「ルイ・アームストロングは11か12歳の時にピストルを撃って少年院に入った。そんなことがあって彼はトランペットを手にするようになったのです。このサッチモの人生を考え子供達にホーンを手渡すというのは、私たちの会の象徴的なメッセージでもありました」。

この外山さんのファウンデーションは「善意の素晴らしい世界 Wonderful World of Good を作り上げている。ハリケーン・カトリーナの後、夫妻は楽器を失ったニューオリンズのミュージシャンのためにプロ級の品質の楽器を集め、また一連のコンサートを開催、ニューオリンズの音楽支援のために8万ドル以上もの義援金を集めてきた。

実は、震災で夫妻も地震の被害を受けたのだが、彼らは自分たちの被害よりも、自分たちの国に音楽を取り戻すことを優先した。

「トイレも風呂も使えず、洗濯もできない…。家は傾いてしまっ。でも、もう、そんな生活に慣れました」。車のついた事務椅子に座り、傾いた床の上を転がっている恵子さんのビデオが、外山さんからメールで送られてきた。ドルフィンズの話聞いたとき、外山さんは彼らを助けなければと思ったという。メールで送られてきた少女の話は忘れることができない。「その少女は音楽がやりたくて、スライドさせる位置に手を動かし、トロンボーンなしでひたすら練習を続けた」という。

ティピティナスからの支援金で夫妻はドルフィンズに楽器を贈り、数週間後、バンドは避難所の前でコンサートを開く。夫妻はこのバンドを見るために悪天候のなか350マイルもの旅をした。コンサートの後、外山さんからのメールには、「雨が降らないかと、この屋外コンサートをとても心配していました。でもその日は、まるでドルフィンズみんなの笑顔のように、最高に清々しく、美しい一日でした」とあった。

サッチモ・サマーフェスト出演後の月曜日、外山夫妻とワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーションのメンバーはニューオリンズを立ち、ニューヨークのクイーンズ区にあるルイ・アームストロングの家へ向かった。帰国前、彼は電話で、ドルフィンズはとても楽しくて家に帰りたくないと言っていると伝えてきた。

「彼らは一生、このことを忘れることはないと思います」と彼は言った。「日本と米国がジャズを通して心と心をつないでいくことは素晴らしいことですし、私たちがその架け橋になれたことを嬉しく思っています」。

ニューオリンズでのドルフィンズの公演を見て、どのように思ったのか、私が彼に尋ねたとき、彼はちょっと口

を閉ざした後…。

「それは感動的でした。あまりにも…」と彼は震える声で言った。「私たちは、何年も何年も長い道のりを歩いてきましたが、こんなことが起こるなんて夢にも思いませんでした。まるで魔法にかかったようで、もしかすると、天国のサッチモが、私達にいたずらをしているのかもしれないネ」。



シーラさんのこの記事は、ニューオリンズの「タイムズ・ペキューン」紙の2ページ全面をそっくり埋め付くし(上段)、ネット版(下段)は「Yoshio Toyama」で同紙から検索すると過去記事から最新のこの記事まで延々と記述が連なる